

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4790100640		
法人名	ウエルケア沖縄		
事業所名	グループホームめぐみ小禄南 1 (2階)		
所在地	沖縄県那覇市高良2丁目9-6		
自己評価作成日	令和5年 3月 3日	評価結果市町村受理日	令和5年 5月 19日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaikogensaku.mhlw.go.jp/47/index.php?action=kouhyou_detail_022_kihon=true&JigyosyoCd=4790100640-00&ServiceCd=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 介護と福祉の調査機関おきなわ		
所在地	沖縄県那覇市西2丁目4番3号 クレスト西205		
訪問調査日	令和5年 3月 23日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

地域に開かれた施設になるように頑張っていきたい。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は地域の天ぷら屋や散髪屋、コンビニ、移動スーパー等の利用を通して地域との交流に努めている。今年度は、地域包括支援センターと連携して地域住民対象にコロナ感染対策を講じて事業所見学会を実施し、依頼を受けて管理者が認知症についての講話を行っている。理念の第一の柱に高品質な自立支援の介護を掲げ、利用者支援における「生活づくり10か条」の第1条は座ることが第一歩とし、食事等の支援時は車椅子の利用者も椅子に座っている。利用者支援においては職員の自主性を尊重し、毎月、担当職員が介護計画に沿ってモニタリングを行い、見直しに際しては家族や訪問看護師等と話し合って介護計画を作成し、現状に即した支援に努めている。法人の教育・研修部による会社内研修制度があり、サービス及び業務基準について試験の実施もある。
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 グループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり、深まったりし、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

確定日:令和 5年 5月 12日

自己	外部	項目	自己評価	外部評価
			実践状況	実践状況
I.理念に基づく運営				
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「ともに笑いともに喜びともに生きていく介護」を目指しその人らしい生活が送れるように取り組んでいる。また、法人内にて年1回介護サービス、理念等取り入れた独自の試験にも積極的に受けられるように働きかけている。	理念は4つの柱からなり、その実施方針として利用者支援における「生活づくり10か条」を法人で作成している。理念の第一の柱に高品質な自立支援の介護を掲げ、法人で年1回、希望者にサービス基準及び業務基準の試験を実施し、合格者には恩典がある。自立に向けた生活づくりの第1条は座ることが第一歩とし、食事等の支援時は車椅子の利用者も椅子に座らせている。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ過でのオープンではあるが、ケアマネが中心となり包括支援センターと連携して交流をすすめている。また、散歩などで近所の方と挨拶するなど出来ることからおこなっている。	事業所周辺は住宅地で、コロナ禍により駐車場での日光浴時に近所の方と挨拶程度の交流がある。管理者は地域の散髪屋やコンビニ等へ挨拶をし、事業所のイベント時には天ぷらを購入する等、地域との馴染みの関係づくりに努めている。地域包括支援センターと連携して地域住民対象に事業所見学会を実施し、管理者が認知症について説明している。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	包括支援センター高良より認知症についての講座への協力依頼あり、施設についてや施設での生活について知って頂けることができた。この活動はこれからも続けていきたいと思っている。	
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に一度行っている。コロナ過で関係者が集まるのが難しいが、来年度はそろって行えるように設備面での整備をしていきたい。(zoom等)	運営推進会議は家族代表と行政、地域代表、知見者が構成員で、年6回、開催している。コロナ禍で外部委員には報告書を郵送していたが、感染者が減少してきたので、直近の会議には外部委員も参加し実施している。離職につながる職員のストレスへの対応に関する質問があり、管理者はストレスチェック等の検討を法人と相談している。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	ちやーがんじゅう課と常にメール等で連絡をとりあっていて、疑問点などご教授して頂いている。	市の職員は運営推進会議の構成員で、事業所から運営状況等の報告をしている。研修等については市より一斉メールで案内がある。今年度は、地域包括支援センターと連携して地域の方を対象に、感染予防対策をして事業所で施設見学会を開催している。その際の「認知症についての講座」の協力依頼には、施設紹介の中で管理者が説明している。

自己評価および外部評価結果

確定日:令和5年5月12日

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	EVの施錠、非常階段につながる扉については安全面の観点から施錠しているが、入居者に閉じ込められていると感じさせない様に気を配り入居者の行動制限にならないようにしている。また、転倒の危険がある入居者にはセンサーマットを使用するなど抑制しない介護を実践している。	身体的拘束等の適正化のための指針を整備し、検討委員会は運営推進会議後に開催し、議事録は職員に回覧している。非常階段の扉の前にはカーテンを設置してカバーしているが、エレベーターは施錠している。職員は、認知症ケア研修や身体拘束・虐待防止のオンライン研修を受講し、見守りと声かけ、センサーマットの使用等で支援している。	事業所は、エレベーターの施錠が身体拘束に該当することを周知した上で、施錠をしている。エレベーターを施錠しないケアについての検討が望まれる。
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	言葉使いや態度等、職員同士で注意しあえる環境作りに取り組んでいる。定期的に法人内で行われる虐待防止研修を受けている。	高齢者虐待・身体拘束防止マニュアルが作成され、職員は、身体拘束・虐待防止のオンライン研修を受講している。管理者は、接遇について職員に話し、不適切な言葉遣いや態度等には個別に注意し、職員のストレス対策については法人に相談している。今年度の研修は1回となっており、次年度からは年2回以上の研修の実施に期待したい。	
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人内、外の研修に参加出来ていないため、十分に理解出来ていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約締結時には、ゆっくり丁寧に説明し質問や疑問に十分に答えられるようにつとめている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族とケアマネ、管理者は常に連絡をとりあっており話しやすい体制を整えている。また要望などがあった際にはすぐにサービスに反映できるようにしている。	家族との連絡はLINEを活用して利用者の活動等の動画や写真を送信し、電話での報告もしている。家族からの面会や外出の要望には事前に連絡してもらい、面会は玄関先で対応している。コロナ禍で中断していたドライブ企画は昨年の秋に実施し、その際は現場で家族と待ち合わせをして交流している。	

自己評価および外部評価結果

確定日:令和 5年 5月 12日

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	半年に一度、管理者との面談を行っている。また、面談以外にも常にコミュニケーションをとり話やすい関係作りに努めている。	管理者は年2回の職員面談以外に、職員が相談しやすい関係づくりに努めている。週1回は家族の介護や男性職員の育児休暇取得の要望等に対応し、面談で職員から「仕事が楽しいです」の言葉がある。排泄の失敗が多い利用者への支援において、職員の意見で家族と協力して様々な支援方法を工夫し、1年がかりでリハビリパンツに移行した事例がある。	
12	(9)	○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員個人の家庭環境にも目を配り、出来る限り希望に添える勤務表を作成している。また、やりがいなど持てるように会社内研修制度を使って知識の向上に努めて参りたい。	職員の健康診断を年1回、定期的に夜勤を担う職員は年2回実施している。管理者は男性職員の育児参加にも配慮し、年次有給休暇を取得しやすい勤務形態を調整する等、仕事と家庭の両立に向けた職場環境の実現に努めている。法人でケア業務・OJTチェックリストが作成され、ハラスメント禁止を含む「改定就業規則」は届出中である。	
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内研修をZOOMにて受けられるように配慮して勤務表を作成している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	沖縄県認知症グループホーム協会に入会し、研修会に参加したり、地域包括、NPO等との活動もはじめている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居者との信頼関係を築けるようにコミュニケーションをとり、不安が少しでも薄れていくように努めている。		

自己評価および外部評価結果

確定日:令和 5年 5月 12日

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	申し込みがあった時点で困りごとを聞き、今出来ることやサービスについて情報提供し入居につなげている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	グループホームとはどのような場所かの理解も含めどのような支援が出来るかケアマネを中心として話し合えるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者が負担に思わないように気を付けながら洗濯物たたみなどを職員と一緒にこなしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会制限がある中でも家族と過ごせるように工夫している。		
20	(10)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	お友達から電話や手紙、年賀状のやりとり、またビデオ通話ができるように支援している。	利用者のこれまでの生活歴や職歴、人間関係については入居時に家族から聞いて把握し、利用者との会話の中でも確認している。職員は友人からの電話や手紙でのやりとりの支援をし、家族が旧盆等の地域行事の際に親戚を連れてくることもあり、対応している。	

自己評価および外部評価結果

確定日:令和 5年 5月 12日

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者の性格や相性を考慮して食事の座席など声をかけている。		
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入居中より家族との関係を大切にしているため、サービスが終了後も連絡が取れるようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	常に入居者とコミュニケーションをとり本人が望むことを把握できるように努めている。また、思いが伝えられない場合には家族から聞き取りをしたり、行動からヒントが得られるように努めている。	利用者の思いは日常の会話の中で直接聞いている。焼き芋やたこ焼きを持ってきて欲しいや家族を呼んで欲しい等は、家族に連絡して対応している。意思表示が難しい利用者には、具体的に選択肢を提示して、例えば、「どっちのケーキが食べたい？」等の確認をしている。表情や行動から推察し、家族から情報を得て支援することもある。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	これまでに関わりのあった人々から情報を提供してもらい、把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	勤務開始する際に直接、他職員から情報収集しまた、記録を確認して業務にあたっている。		

自己評価および外部評価結果

確定日:令和5年5月12日

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居者について気になる事象があった場合にはすぐにミニカンファレンスを行い、家族、ケアマネ、訪問看護師などに相談してケアにつなげている。	介護計画の作成については契約書にも記載し、長期目標は1年、短期目標は6か月で設定している。職員の居室担当制を実施し、担当職員が毎月、計画に沿ってモニタリングを行っている。状態変化等による計画の見直しに際しては、家族や訪問看護師等の関係者と話し合って計画を作成し、現状に即した支援に努めている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録の書き方について、個人差があるため、これから研修会を開いて行く予定。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	コロナ過では買い物もままならず、買い物代行や病院受診の付き添いなど家族に提案している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ過でボランティア活動に制限がある中、NPOの読み聞かせ会に参加できた。今後は、もっと機会を増やしていきたい。		
30	(13)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	毎月2回訪問診療の他、月2回の訪問看護師の健康チェックをうけており、常に連携を取っている。	利用開始時に全員、事業所の協力医の訪問診療に変更している。2人の利用者は心臓病等の専門医を家族対応で受診し、血圧や体重等を記載した情報提供書を提供する場合もある。月2回の訪問看護も利用し、利用者の健康管理に努めている。4月から法人のクリニックが那覇市でオープンするため、次年度から訪問診療医を変更する方針である。	

自己評価および外部評価結果

確定日:令和5年5月12日

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員は、いつもと違う変化に気づいた際には訪問看護師に電話やラインワークスにて報告、指示を仰ぐ体制を整えている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居者が入院になった際には、病院の地域連携室と連絡を密にとるようにしている。		
33	(14)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居の際にもご家族と終末ケアについて話し、いざ近づいてきた際には再び、家族の意向を聞くようにするとともに家族間でも話し合いができるように支援している。	終末期の看取り等については、利用者や家族に利用開始時に説明して意向を確認し、段階を踏みながら同意書を取っている。職員はACP(人生会議)研修をオンラインで受講し、利用者の人生の最終段階における意思決定を支持する技術を学習している。看取りの研修も実施し、チームでの支援に取り組んでいる。8月に、家族と協力しながら看取りを行っている。	
34	(15)	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の連絡体制は確立している。応急処置については、その都度訪問看護の指示を仰ぐとともに定期的に勉強会を行えるように調整中。	緊急時対応マニュアルや事故対応マニュアルが整備されている。事故報告書も作成され、運営推進会議や必要に応じて市へも報告している。事故があった場合、翌日には管理者を含む2～3人でミニカンファレンスを実施し、原因や再発防止に向けて検討し、職員へ周知している。	
35	(16)	○災害や感染対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。また、感染症の予防やまん延防止の為に委員会の開催や指針を整備し、研修及び訓練を定期的実施している。	感染対策には力を入れており、研修以外にも訪問看護師にきいたり蔓延防止に努めている。また、消火器の使い方など同一建物にある事業所とともに訓練を行うなどしている。	感染症や新型コロナ感染対策の研修を実施し、予防やまん延防止に努めている。避難訓練は、複合施設のため合同で年2回実施し、実施報告書も作成されている。利用者には恐怖感を与えないためと、利用者には扮した職員が参加し、利用者は参加不可となっている。訓練は夜間想定のみの実施となっている。水や食料等は、利用者の3日分を備蓄している。	災害を想定した実践的な訓練として、利用者も参加し、避難方法を全職員が身につけ、昼夜を想定した年2回以上の訓練の実施が望まれる。備蓄品は利用者と職員を合わせた3日以上以上の備蓄が望まれる。

自己評価および外部評価結果

確定日:令和 5年 5月 12日

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシーの確保は大切なことと認識しておりカーテンをしめるなど気を付けるようにしている。	契約書に利用者の権利を明記し、利用者の人格の尊重とプライバシーの確保に努めている。意思が伝えにくい利用者が多く、声かけや気配りに対応している。入浴や排泄の同性介助は勤務形態上、希望に添えないことを利用開始時に説明している。介護理念に「利用者の尊厳を護り、その人らしい生活を想像し、そして創造していく介護を提供する」を掲げ、支援している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員とのコミュニケーションはしっかりとれている。自分で決めることが出来ない入居者にも選択肢をいくつか設けて選べるように工夫している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者には常に声掛けし希望に添えるように気を配っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	鏡の前にすわってもらい身なりを整えるように支援している。		
40	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	外部委託食材にて提供しているが、入居者本人の好き嫌いも考慮して家族から提供を受けたり、入居者からレシピを聞いたりしてなるべく好みに添えるように工夫している。	ご飯とお汁は職員が作り、おかずは配食で温めて提供している。ごくまれに夕食はおかずを1品手作りしたりする。パンが好きな利用者は家族に差し入れをしてもらっている。介護度の高い利用者が多く、調理等への参加はない。職員は、利用者の食事介助を優先し、弁当を持参して休憩時間に食事を摂っている。	事業所の特性を踏まえて、グループホームの趣旨である利用者と一緒に同じ食事を楽しむ環境づくりの検討が望まれる。

自己評価および外部評価結果

確定日:令和 5年 5月 12日

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	なるべく入居者の好みに対応できるように工夫している。また、家族に協力を得て入居者の好物を差し入れて頂いている。また、栄養バランスも考えて栄養補助食品も取り入れるようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、職員の声掛けや見守り、介助にて歯磨きなど口腔ケアを行い、2週間に1度、歯科衛生士によるチェックもおこなっている。		
43	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	入居者の状態にあったトイレ誘導、オムツ交換を行っている。	利用者の排泄パターンを把握し、日中は全員トイレでの排泄支援を行っている。夜間はオムツ交換やポータブルトイレの利用者もいる。排泄の失敗が多いが、リハビリパンツを嫌がる利用者に、職員は家族と連携して支援を行い、1年がかりでリハビリパンツがはけるようになった事例がある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分補給やおやつにオリゴ糖や豆乳などひとりひとりにあったものを提供するとともに排便確認をしっかりと行い便秘の予防に努めている。		
45	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週2回の入浴日の設定はあるが、本人の希望もふまえて対応している。	入浴は週2回で、一人ひとりに添った支援を行っている。入浴を拒否する利用者があるが、本人の意向を確認しながら、清潔保持のため曜日を変えたりして対応している。脱衣場はエアコンを設置し、冷暖房が完備されている。事業所からプレゼントされたシャンプーが、利用者ごとに名前が書かれて置かれている。	

自己評価および外部評価結果

確定日:令和5年5月12日

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自宅から使い慣れた家具や備品、家族の写真などに囲まれ、ゆったりとした気持ちになれる環境作りを心がけている。		
47	(21)	○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者の薬の管理は業務委託している薬局と協力して行い、職員は入居者の服用している薬の内容を常に把握し、状態によって訪問看護師に連絡できる体制を整えている。	法人の服薬管理マニュアルが整備され、提携している薬局と協力し、配薬と薬の管理を行っている。職員は薬の内容を把握し、訪問看護師と相談できる体制がある。利用者の状態変化時は、薬の変更等を医師と相談している。誤薬事故はない。法人からの「服薬介助について」の追加分の通知については、回覧板で職員へ回覧し、確認の押印もされている。	
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家族と相談して差し入れを持ってきてもらったり、ドライブに連れ出してもらったりして楽しみを見出せるように支援している。		
49	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ過ではあるが、年末年始や特別なイベントには家族と過ごせるように支援している。	交通量が多い地域のため、施設周辺の散歩は厳しく、駐車場での外気浴をしている。その際、近隣の人と挨拶を交わすこともある。コロナ禍で外出制限があり、家族とは電話やビデオ通話で連絡を取り合っている。家族にドライブに連れ出すよう声をかけをし、年末年始に外出できる利用者は、自宅等で家族と過ごせるよう支援している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の管理は難しいが欲しいものが買える喜びを大切にしたいため、時々移動スーパーなどで買い物支援を行っている。		

自己評価および外部評価結果

確定日:令和 5年 5月 12日

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居者から依頼があったり、また家族から依頼があった際にはやりとりが出来るように支援している。時にはビデオ通話をレクチャーしとても喜んで頂いたこともある。		
52	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	フロアには、四季折々に壁面を飾り、季節感を出すとともに飽きのこないような環境作りに努めている。	共用空間の壁面に、利用者と職員が共同制作した桜の貼り絵を飾って季節感を出している。座席配置は気の合う利用者同士が過ごせるよう配慮している。コロナの感染対策を講じ、利用者には感染者はいない。面会は玄関先で、15分以内、マスク着用、ソーシャルディスタンスを守って実施している。家族にビデオ通話のレクチャーをする等、利用者が家族と楽しめるよう支援している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	気の合う仲間と一緒に食事したり、一人で新聞を読んだり、ソファに横になったり出来る空間作りを心掛けている。		
54	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使い慣れた物や写真に囲まれて落ち着いた空間作りを家族とともに取り組んでいる。	居室には、ベッドとエアコン、カーテンが備え付けられている。利用者はキャビネットや馴染みの家具を持ち込み、2人はテレビを持ち込んでいる。写真やぬいぐるみ、石原裕次郎のポスターを飾っている利用者もいる。居心地よく過ごせるよう、その人らしい居室づくりの支援をしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設内に目印等をつけ、一人ひとりにあった対策で自分のことは自分でできるように工夫をしている。		